「国際浅草学プロジェクト発足にあたって」

カンザス大学東アジア言語文化学部現代日本文学准教授
イレイン・ジェールベル

私はこれまで大正時代における小説、日本文化における遊びと遊び論、人形とドッペルゲンガー、笑いと神道儀式について研究してまいりました。日本の小説、日本の小学校で使用されている国語の教科書を分析して、日本の教育システムについて授業を行ったこともあります。

現在、焦点を当てて研究しているのは視覚と文学作品の関連性です。明治、大正時代に展示、パノラマ、幻灯機（初期のプロジェクターです)、立体写真鏡、カメラや写真、イラストやショーウィンドー・ディスプレイといった新しい技術が導入され、当時の文学にも反映されていました。小説の中における視覚体験の役割が、私の研究の出発点となっております。

こういった視覚体験の革命によって、人間の視覚、審美眼、見るという動作を中心とした小説にたいして人々の関心が一気に高まりました。中でも私は、幻覚や幻想のような視覚現象に関心を持った作家等、宇野浩二、谷崎潤一郎、芥川龍之介、佐藤春夫、江戸川乱歩の作品について考察しています。現在は宇野浩二の『夢みる部屋』と、谷崎潤一郎の『白昼鬼語』を翻訳中です。将来は芥川龍之介の『浅草公園』と、江戸川乱歩の『パノラマ島奇譚』を翻訳したいと思っています。

20 世紀初期には、視覚を用いた娯楽施設が浅草に次々と建ち並びました。例えばパノラマ館、凌雲閣の 12 階の塔、浅草花屋敷、水族館、宮戸座、歌舞伎座、並びに電気館という日本の最初の映画館がよく知られています。先ほど述べました作家らをはじめとし、ほかの作家による浅草を場面とした作品も数多く見られます。つまり、私にとって浅草は文学の視覚文化を探求していく上で、まさに興味深い場所と言えます。

数年前に、機会があって下町風俗資料館というところを主人と一緒に訪問いたしました。１階には明治時代の町人の家の実物大に近いモデルが建っていました。その家の部屋はいずれもとても小さくて暗かったのです。100 年以上前に樋口一葉とお母さんと妹は、恐らくそういう家に住んでいたのかと思いました。資料館にはほかに日本の伝統的な玩具と、祭り行列の展示がしてありました。私と主人がいすに座って休憩をしている間、中学生ぐらいの子供たちがにぎやかにおしゃべりをしながら、楽しそうにその玩具で遊んでいるのを見かけました。そこに居合わせた 75 歳ぐらいのおじいさんが、その子供たちに玩具の扱い方を親切に教えているのを見て、とてもほほえましく思いました。また、同じ展示室に別の年取ったおばあさんもいて、祭りの山車を引っ張っている人形の展示を熱心にながめていました。まるで子供時代に戻ったかのようにうれしさと、なつかしさがいっぱいの表情で人形の細部に見とれている姿を見て、私たちの心もなごんだのです。

大正時代の新聞は、当時の日本のことを「子供の天国」と言ったそうです。そういう世

相を浅草のような場所で調べることはとてもおもしろい勉強になると思います。大正期と昭和前半の作品では、浅草は人間がふだんの自意識を捨てて、日常とは異なった時間と空間に入る場所として描写されていることがあります。川端康成の『浅草紅団』では、浅草は自分というものが流動的で、不確定なものに変化しやすくなる空間として描写されています。江戸川乱歩の『押絵と旅する男』でも、浅草は猥雑さと幻想の空間です。このように遊びの文化を研究するには、浅草ほど最適な場所はありません。

浅草に作品の場面を設定したいろいろな作家の心理を深く理解するために、20 世紀の浅草の日常生活のさまざまな面を詳しく探求していくことは、本当におもしろいと思われます。「国際浅草学プロジェクト」を企画なさった先生方と、国際浅草学グループ実行委員会の方々に対して、とてもありがたく存じております。そしてこのプロジェクトに参加させていただき、私は心の底から感謝いたしております。